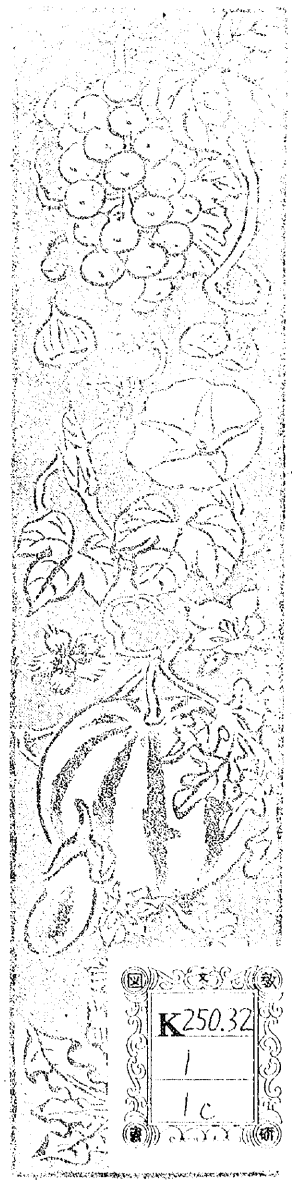


K250.32

1

1c

くにのあゆみ 上

文部省

もくろく

第一　日本のあけぼの……一
一　歴史のはじめ……一
二　大和の朝廷……二
三　大陸文化のとり入れ……四
第二　開け行く日本……六
一　聖徳太子……六
二　大化の改新……八
三　奈良の都……九
四　外國との交はり……一二
第三　平安京の時代……一五
一　平安の都……一五
二　藤原氏の榮え……一六
三　はなやかな文化……一七
四　地方のありさま……一八
五　武士のおこり……一九
第四　武家政治……二三
一　鎌倉幕府……二三
二　社會と文化……二五
第五　鎌倉から室町へ……二九
一　建武のまつりごと……二九
二　室町幕府……三一
三　經濟と文化……三四
四　新しい時代への動き……三六
第六　安土と桃山……四〇
一　國内の統一……四〇
二　外交と文化……四二

第一　日本のあけぼの

一　歴史のはじめ

大昔の生活　アジヤ大陸の東の海に、北から南へかけて細長くつらなる島島、これが私たちの住んでゐる日本です。暑さ寒さもあまりきびしくなく、ほどよく雨がふり、草や木が生ひしげり、四季のながめも、それぞれちがつたおもむきがあります。

この國土に、私たちの祖先が住みついたのは、遠い遠い昔のことでした。はつきりしたことはわかりませんが、少くとも數千年も前のことにちがひありません。世界のどこの地方でも、文化の開けなかつた大昔には、人はまだ金屬を使ふことを知らず、石で道具を作つて、用ひてゐました。かういふ時代を石器時代といひます。私たちが、あたたかい南向きのをかなどを歩いてゐると、ときに畠の中に貝がらが白くちらばつてゐるのを見かけることがあります。これは、そのころの人人が、はまぐりやしじみなどを、ひろつて食べた貝がらがつもつてできたもので、これを貝塚といひます。貝塚からは貝のほかに、魚やけものの骨や、そのころの人人がふだん使つてゐた道具などがはり出されます。これらによつて、大昔の人人がどんなくらしをしてゐたかがわかります。

狩りをするのと魚をとるのが、そのころの人人のおもなくらしでした。野山に出ては木の実をあつめ、石のやじりをつけた矢を用ひ、鹿やゐのししをとつて食べ物としてゐたのです。また島國ですから、海べで貝をひろひ、鹿の角で作つたもりやつりばりなど使つて、魚をとることも多かつたやうです。食べ物を入れたり、

にたきをするのには、土のはちや、かめが使はれました。これらの土器には、大てい、なは目のもやうがついてゐます。

生活の変化　やがてこのくらし方に、大きな変化がおこつてきました。それは海の向かふから、田をたがやして稲を植ゑる方法や、金属で道具を作るわざがつたへられたことです。私たちの祖先がまだ石器を用ひてゐたころから、おとなりの支那では、銅に錫をまぜた青銅器を使ひ、やがて鉄器を使ふやうになりました。これらが日本にもつたはり、金属の道具を用ひるやうになりました。青銅の剣やほこなどが作られ、また鉄の道具もできました。土器も新しいものが使はれるやうになりました。

農業のはじまり　農業がはじまつたので、生活が一だんと進んできました。水田に稲を植ゑる方法がひろまると、人人は年年これをたがやして行くために、きまつた土地に住みつかなければなりません。かうしてあちらにもこちらにも、人人の集り住む村ができ、村の人人は力をあはせて、田植や取り入れにはげみました。また力を出しあつて池やみぞをほつて水を引き、野原を開いて水田とすることにつとめました。

世の中が進むにつれて、すぐれた人が出て、多くの村村をまとめてさしづをするやうになりました。かうした集りが方方にできました。中でも文化の早く開けた九州の北部や大和の地方には、勢ひのあるものがあらはれ、中には大陸に渡つて支那の文化をとり入れるものも出てきました。このやうな日本が一つの國家にまとめあげられてできたのが大和の朝廷であります。

二　大和の朝廷

國のおこり　大和は今の奈良縣にあたる地方です。緑の山山にかこまれたこぢんまりした盆地であります。そのころ最も有力なものが、この盆地からおこつて、だんだん日本を一つにまとめたのであります。こ

の大事な仕事をおはじめになり、畝傍山のふもとの橿原の宮で、最初に天皇の位におつきになつた方が、神日本磐余彦天皇といはれてゐます。

大和の朝廷の勢力は、それからしだいに地方にのびて行きました。出雲の國を治めてゐた勢ひのあるかしらも、大和の朝廷のもとにつくことになりました。しかし大和から遠くはなれた地方には、まだ開けてゐなかつたところが少くありませんでした。關東から奥羽の地方にかけては、蝦夷が住み、九州の南のはしには熊襲が住んでゐました。朝廷ではおひおひこれらの人人も、すべて一つにするやうにつとめました。かうして、大和の朝廷を中心に、日本は一つの國をかたちづくつたのであります。

氏と姓　遠い昔、多くの人人は農業にはげんでゐました。世の中が進むにつれ、農業のかたはらに、土器や玉など、手のこんだ品物を作るのを仕事とする人もあらはれました。人人の大部分は、直接朝廷に仕へたのではありません。地方には、それぞれ身分の高い人人がゐて、人民や土地を治めてゐました。この人人は同じ血すぢのものがより集つて、氏をつくり、その上に立つ人が、その氏をひきゐて朝廷に仕へたのです。氏には姓といふ身分があつて、家がらの高さをあらはしました。氏の中には、朝廷に出て役目をうけもつてゐるものもあります。たとへば、蘇我氏は朝廷の藏の出し入れをうけもち、大伴氏と物部氏は朝廷をまもるのを役目としてゐました。その役目は、代代その氏でうけついで行つたのです。

古墳　世の進むにしたがつて、人がなくなると、土を高くもり上げた、りつぱな墓をつくるやうになりました。これを今、古墳といつてゐます。大ていは、まるい形をしてゐますが、大陸に見られない前方後円の形をした小山のやうなものもあります。中でも應神天皇・仁德天皇の御陵などは、きはだつて大きなものであります。これらの古墳からは、家や人や動物の形を

した埴輪が發見され、鏡や玉や刀や、よろひ、かぶとなどもほり出されます。これらの品物を見ると、そのころの人人の生活のありさまがよくわかります。

三　大陸文化のうけ入れ

朝鮮との關係　支那は、世界のうちでも最も早く文化の開けたところの一つです。その支那に漢といふ強い國がおこり、やがて朝鮮半島の北の方にまで、勢ひをひろげてきました。これは今から二千年あまり前のことです。早くもこのころから、九州の北の方の人人は、半島に渡つて、その進んだ文化をとり入れることにつとめてゐたのです。そののち半島の南の方に、百濟と新羅の二國ができ、また長く漢の勢ひがおよんでゐた北の方には、高句麗がおこつてきました。大和の朝廷は、國内をまとめたのち、半島の南のはしにある任那と手をにぎつて、とくにしたしい間がらとなりました。やがて任那が新羅や高句麗におびやかされたとき、兵を送つてこれをたすけました。それからのちかへつて半島の國國と、一そう深い交はりを結ぶことになりました。

漢字と儒教　かうしてわが國と半島との交はりが深くなりましたので、半島や支那本土から大陸の文化が盛んにはいつてきました。應神天皇・仁德天皇の代から、ことにそれが目だつてきました。漢字がつたはつたのも、孔子の說いた儒教の教への知られるやうになつたのもこのころのことです。大陸や半島からたくさんの人人が渡つてきて、わが國に住みつくやうになり、それにつれて、養蚕・機織・裁縫・鍛冶などの、進んだわざもつたはりました。朝廷は、これらの人人をこころよく迎へ、はたらきのある人には、重い役目や高い身分をあたへて、十分にうでをふるはせました。このやうに、いろいろ新しい文化をうけ入れましたので、生活は日を追うて進み、人人の心はしだいに高められて行きました。

佛教　半島の國國の中では、任那のほかに百濟がわが國と最もしたしくしてゐました。支那の文化も百濟を通つてくることが多かつたのですが、ことに大せつなのは佛教をつたへたことであります。佛教はインドの釋迦が說いた教へで、支那にひろまり、半島につたはり、さらに百濟からわが國に渡つてきたのです。それは今からおよそ千四百年ほど前のことであります。

問題

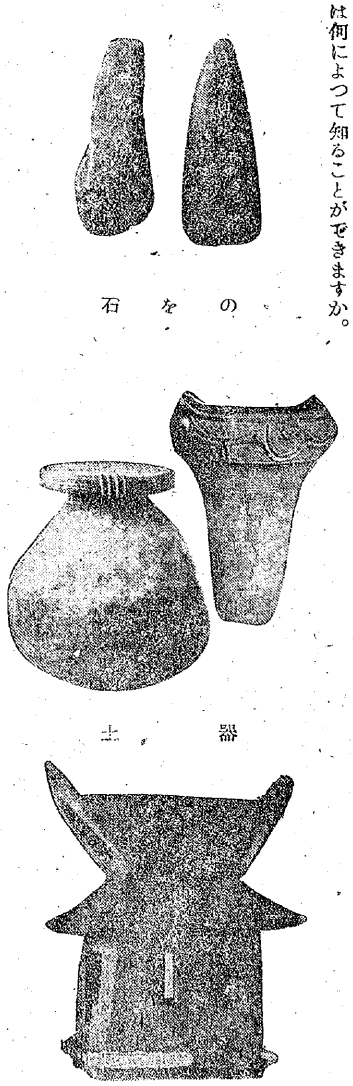
一　大昔の人人はどんなくらしをしてゐたでせうか。またそれは何によつて知ることができますか。

二　貝塚とはどんなものですか。近くに貝塚があつたらしらべてみませう。

三　九州の北部や大和の地方が、とくに早くから開けたわけを考へてみませう。

四　古墳とはどんなものですか。古墳からほり出される物について、そのころの人人の生活を考へてみませう。

五　大陸の文化はどうしてつたはることになつたのですか。また大陸からはどんな文化がつたはり、わが國ではそれをどんなふうにとり入れたかをしらべてみませう。



石の器

土器

埴輪の家

第二　開け行く日本

一　聖德太子

わが國は大陸の文化をとり入れながら、だんだん開けて行きましたが、聖德太子のころから、にはかに進んできました。

冠位と憲法　聖德太子は、推古天皇が位におつきになつたとき、皇太子におたちになり、同時に攝政として、政治をおとりになることになりました。それは今から、およそ千三百五十年ばかり前のことであります。

太子は、攝政の間にいろいろな仕事をなさいましたが、その第一は政治をたてなほすことであります。そのころ朝廷に仕へる氏の中でも、蘇我氏のやうに勢ひのあるものが、土地と人民をたくさん持つて、力をふるつてゐました。また朝鮮半島では、新羅が強くなつて、わが國となじみの深い任那をほろぼし、百濟を攻めるなど、國の內も外も、大分やうすがゝ、變つてきました。太子は、これらのやうすをごらんになつて、まづ家がらで役目をうけつぐ昔からのならはしを、改めたいとお考へになり、はたらきのある人を重く用ひるために冠位をお定めになりました。つぎに十七條の憲法をつくつて、役人たちをおさとしになりました。そのはじめに「和」の大せつなことをお說きになつてゐます。これは朝廷に仕へる人人が、仲よく力をあはせなければならないことを示されたのです。また勢ひのある人人が、人民から勝手に稅をとりたててはならないこと、人民のうつたへをよく聞いて、えこひいきのない政治をしなければならないこと、大せつなことはひとりぎめにせず、大勢の人と相談した上でやらなければならないことなど、政治をする上の心得が、こまごまと示されてゐます。

隋との交はり　そのころ、大陸では隋が久しくみだれてゐた支那を一つにまとめ、大そう榮えてゐました。太子はこれと國の交はりを開いて、その進んだ文化をとり入れ、わが國をもつとよい國にしようとお考へになり、小野妹子らを隋におつかはしになりました。その時の手紙の書き出しには「東の方の天子が、この手紙を西の方の天子にさしあげます。」と、しるされてゐました。それまでは、わが國から、支那にみつぎものを、持つて行くといふことになつてゐましたが、この時から、対等のつきあひが開かれたのであります。

太子はそののちも、使ひのものと一しよに留學生や僧をお送りになり、支那の制度や學問について勉强をおさせになりました。この人人が、のちに大化の改新をなしとげる上に、大きなはたらきをすることになるのです。

法隆寺　太子は、またあつく佛教をたつとばれ、これを國內にひろめるために、力をおつくしになりました。ご自分で佛教の書物までもお書きになりましたし、たくさんの寺をお建てになつたりしました。そのために學問や美術も大そう進歩しました。

今、奈良の西南斑鳩の里に、なだらかな山をうしろにして立つてゐる法隆寺は、太子がおすまひの宮殿のかたはらにお建てになつた寺であります。ふつくらした丸柱の中門、どつしりかまへた金堂、大空にそびえる五重塔が、白い砂の上に、とりどりの形を見せてゐます。これらの堂塔は、今のこつてゐる木造の建物としては、世界で一ばん古いものであります。金堂の中には太子がおつくらせになつた佛像などのほか、力のこもつた線と美しい色でゑがいた壁画など、古い美術品がたくさんのこつてゐます。

二　大化の改新

大陸のやうす　かうしてゐる間に、支那では隋がほろびて唐がおこり、一そう盛んな國となりました。わが國では、ひきつづき遣唐使を送つて、唐と國の交はりをつづけてゐましたので、そのやうすはすぐにつたへられました。これを見聞きした人人の間には、わが國も、唐の政治のしくみなどを見ならつて、國の中をととのへなければならないといふ考へがおこつてきました。これを實行しようとくはだてられたのが、中大兄皇子です。

皇子は、中臣鎌足らとご相談の上、そのころ大きな勢ひをふるつてゐた、蘇我氏のかしらをほろぼし、新しい政治を行はれることになつたのであります。

改新の政治　まづ孝德天皇が、位におつきになりました。中大兄皇子が皇太子となられ、鎌足や、支那に勉強に行つて、帰つてきた人人などを、重くお用ひになつて、古いならはしを、とりのぞき、新しい政治をおはじめになりました。時に西暦六百四十五年でありました。この時、はじめて、大化といふ年号を定められましたので、この新しい政治を、大化の改新といひます。

改新の政治で定められた一ばん大せつなきまりは、土地と人民をすべて公の土地、公の人民とし、班田の法といつて、人はみな六歳になると、國家から男女それぞれきまつたひろさの田地を分けてもらひ、一生の間これをたがやすしくみであります。人民は、これからは勢ひの強い氏に仕へるのではなく、誰もが公民としてはたらくことになりました。

大寶律令　つぎの齊明天皇の代にも、中大兄皇子がひきつづき、皇太子として政治をおたすけになりました。阿倍比羅夫が秋田・津輕の方面まで、出かけて、蝦夷をしづめたのは、このころのことです。朝鮮半島では、新羅の勢ひが、ますます強く、唐と力をあはせて、百濟をほろぼしましたので、百濟は、わが國にたすけを求めてきました。わが國は、兵を出して、百濟をもう一度もりたてようとしましたが、唐の勢ひが強くて、うまく行きませんでした。この間に、中大兄皇子が位におつきになりました。これを、天智天皇と申します。

天皇は朝鮮のことよりも、政治のたてなほしをなしとげることの方が、もつと大せつである、とお考へになり、兵をお引きあげになりました。ここでわが國は、朝鮮半島からすつかり手を引くことになつたのです。天皇の代に新しい政治のし方を、こまかく定めておきてがつくられましたが、そののちいくたびも改めた上、文武天皇の大寶元年（西暦七〇一年）に大寶律令となつてでき上りました。大化の改新がはじまつてから六十年ほどのちのことであります。この規則によりますと、朝廷には太政大臣・左大臣・右大臣をはじめ、たくさんの役ができて、政治をうけもち、國には國司がおかれました。九州は外國とのつきあひの上で、大せつなところでしたから、とくに大宰府がまうけられました。また都に大學、國ごとに國學をおき、役人は、これらの學校で勉強した上、試驗に及第したものからとることに定められました。

土地の分け方についても、さらにこまかい規則ができました。しかし班田の法ができても、身分の高い人には特別にひろい土地があたへられました。その上、人の數がふえて、分ける土地が足りなくなつて行つたので、奈良時代になつてから、新しく田地を開くやうにしむけるため、田地を開いた人は、その土地を自分のものにしてよいことにしました。そのために、土地を公のものにしておくたてまへは、あまり長つづきしなかつたのであります。

三　奈良の都

新しい都　新しい制度ができて、朝廷の政治が日本

中にひろく行きわたることになつたので、それにふさはしいりつぱな都をつくらうといふことになりました。そこで天智天皇は近江の大津に、持統天皇は大和の藤原に都をおたてになりましたが、どちらも長くつづきませんでした。やがて、元明天皇の和銅三年（西暦七一〇年）今の奈良市の西部に大きな都がいとなまれました。今からおよそ千二百三十年あまり前のことです。

それから七代七十年あまりの間、ここがわが國の都となりました。これまでは大てい天皇のおかはりになるたびに、おすまひになる宮の場所も変りましたし、その場所がにぎやかな町となつたのでもありませんでしたが、これでわが國にも、唐の都の長安とくらべられるやうな都ができたわけです。

はばの廣い道路が、ごばんの目のやうに、きちんと町をくぎり、朝廷のある大内裏や、寺寺の白い壁、赤い柱の大陸風の建物が、あちこちに立つてゐます。物を賣り買ふ市も、開かれました。この賣り買ひを、便利にするため、新しく銅で、おかねのつくられたのも、世の中の進歩を示してゐます。それまでは、布や糸や稲などが、おかねの役目をしてゐたのでした。奈良に都ができるすこし前に、武藏の國から、銅がとれるやうになり、それでおかねをつくつたのであります。

記紀と萬葉集　この時代になつて、いろいろな書物が書きしるされるやうになりました。まづ元明天皇の代に古事記が、元正天皇の代に日本書紀ができ上りました。どちらも古くからつたはつた神話や物語などを書きとめた本です。

つぎには、おもに奈良時代の和歌を集めた萬葉集ができました。和歌は昔から日本にあつた文學ですが、これは今のこつてゐる和歌の本では一ばん古いものです。天皇をはじめ一ばんの人民にいたるまでの歌が、四千五百ほど集められてゐます。中でも柿本人麻呂の

歌が有名です。

國分寺と大佛　奈良の都が最も榮えたのは、聖武天皇の天平の代であります。天皇は、佛教を深くうやまはれ、これをひろめるために、國ごとに、國分寺をお建てになりました。國分寺は、國司の役所の國府とともに、その地方の中心となり、都の文化を、地方につたへる役目をしました。

今でも「國分寺」とか「國分」とかいふ名が、土地にのこり、國分寺の堂や塔の大きな台石が、田や畠の間に見出されたり、その屋根をかざつてゐた布目瓦が、ちらばつてゐたりします。

天皇は、さらに都に、東大寺の大佛をおつくりになりました。大佛の高さが、およそ五丈三尺（およそ十六メートル）、大佛殿の高さが十五丈あまり（およそ四十五メートル）といふ大がかりのものです。かうして佛教が大そう盛んになりますと、それにつれて、美術品をつくるわざも、目だつて上手になりました。今、東大寺の中にのこつてゐる正倉院や、三月堂などの建物、そこにをさめられた數數の宝物や佛像を見ると、そのころの文化がどんなに進んでゐたかが、よくわかります。

和氣清麻呂　しかし都の文化がこんなに榮えても、それをたのしんだのは、朝廷に關係のある身分の高い人人ばかりでした。貧しい人民や地方の人人は、低いくらしをつづけてゐました。

また佛教が朝廷からあまりにたつとばれたため、國の費用がかさんだばかりでなく、僧の中には、政治に口を出すものさへあらはれました。中でも道鏡は稱德天皇に重く用ひられ、高い役につき、つひに天皇にならうとするのぞみをおこしましたが、和氣清麻呂が强く反対して、このくはだてをさまたげました。つぎに光仁天皇がお立ちになり、佛教を大事にしすぎたのを改めるなど、いろいろ政治をたてなほされたのであります。

四　外國との交はり

遣唐使　百濟のことで、一時あらそつた、わが國と唐とは　またぢきに仲よくなりました。もとのやうにわが國から、唐へ遣唐使が行き、唐からも使ひがきました。

新羅とも前通りつきあひが行はれました。遣唐使の一行は留學生を加へて、五百人をこえることもありました。これらは四せきの船に分れて乘り、難波（今の大阪）の港を出て、筑前の博多により、東支那海を横ぎつて大陸へ向かひます。そのころの船で外海の荒波を乘りきるのは、容易なことではなく、たびたび吹き流されたり、くつがへされたり、まつたくの命がけの航海でした。

それでも唐のすぐれた文化をとり入れようとする熱心さから、この危險を乘りこえて、そのつとめをはたしたのであります。

聖武天皇の代は、唐の最もはなやかな時であります。西は中央アジヤ、南はインド支那半島までも勢ひをひろめ、まはりの各地でおこつた學問や宗教や美術や工藝などをつたへて、支那の文化は大そう進んでゐました。

しかも、その西の方のアラビヤも、強い國となつてゐたため、たがひのゆききも行はれ、遠く、アラビヤやペルシヤで榮えてゐた文化も、唐に流れこみました。

そこで唐としたしく交はつてゐたわが國にも、こんなに遠い西の方の文化がつたはり、天平の美術工藝は、さらに一そうの色どりを增しました。

渤海との交はり　元明天皇の代に、滿洲地方に渤海といふ新しい國がおごりましたが、この國からも聖武天皇の代に、使ひがきて、毛皮などの產物を持つてきました。渤海はそののち、國がほろびるまで、およそ二百年の間、たびたび使ひを送つてきました。わが國

からも、使ひを送つて、したしみをかさねたのであります。

外國人の渡來　このやうに奈良時代には、東西の交通が大いに開け、海外の國國との交はりは、これまでにないほど、にぎやかなものになりました。鑑眞といふ唐のえらい僧が、敎へをつたへるためにわが國に渡らうとして、いくたびかなんぎにあひ、めくらとなつても、なほ最初の志をまげないで、とうとう、そののぞみをとげたこともありました。インド人やペルシヤ人が、はるばると海山を越えて、わが國に渡つてきたこともありました。

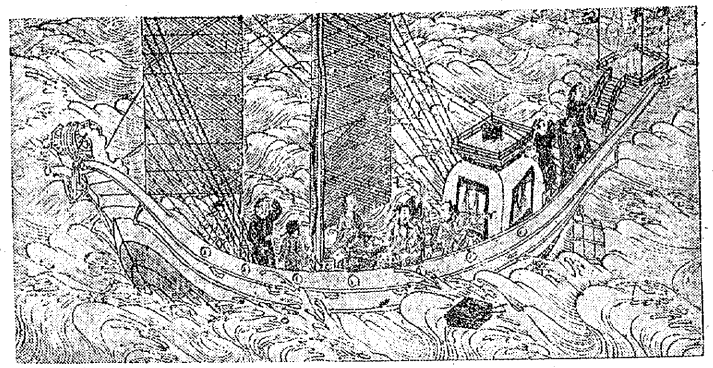
また唐へ留學して學問をへ、帰りに船が吹き流されて、國に帰ることができず、そのまま唐の朝廷に仕へて高い位に上り、一生を終つた阿倍仲麻呂のやうな人もあります。

問題

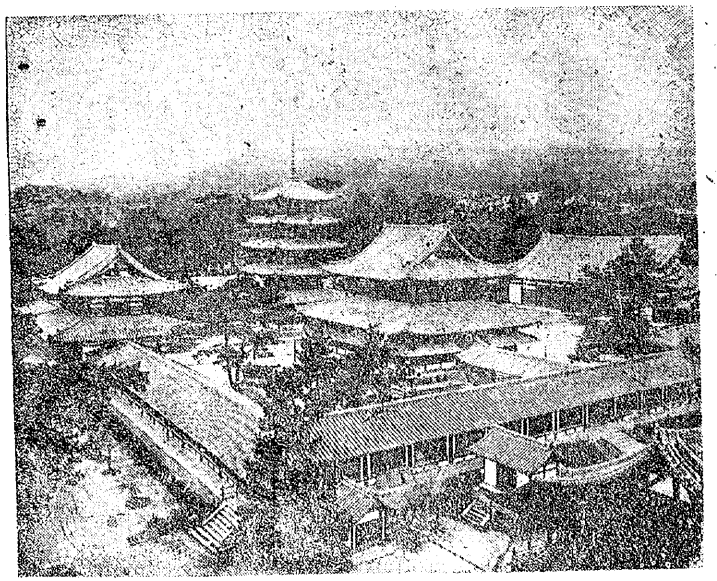
一　聖德太子のなさつた仕事についてまとめてみませう。

二　大化の改新とはどんなことですか。また改新の政治で大せつなことをあげなさい。

三　國分寺とはどんな寺で、どんな役目をしましたか。近くに國分寺のあとがあつたら、その場所、かまへの大きさ、礎石、布目瓦などをしらべてみませう。



遣唐使の船



法隆寺

第三　平安京の時代

一　平安の都

都うつり　光仁天皇のつぎに、桓武天皇が位におつきになりました。奈良の朝廷の政治を、すつかりたてなほすためには、どうしても、都をうつして人人の氣持を新しくしなければならないと、考へられるやうになりました。そこで桓武天皇は和氣清麻呂のかんがへをお用ひになつて、延暦十三年(西暦七九四年)に、山城の京都の地に、都をおうつしになりました。新しい都は、三方になだらかな山山をひかへ、清い水が流れて、けしきのよい土地でありました。その上、東西の國國とのゆききも便利でありますし、淀川によつて、難波の港に出るにもつがふのよい場所をしめてゐました。四方から集つてきた人人は、この新しい都を平安京といひました。それからのち、明治天皇が東京におうつりになるまで、およそ千年の間、代代の天皇はここにおいでになりました。ことに、鎌倉に幕府が開かれるまでの四百年ばかりは、平安京が、政治の上でも、文化の上でも、わが國の中心になつてゐたのであります。

蝦夷の同化　都うつりにともなつて、國の中では、いろいろ新しいこころみがはじまりました。政治についても改められたところが少くありません。ことに地方の政治をよくすることに、力がそそがれました。東北地方は、孝德天皇の代に今の新潟あたりまで開け、聖武天皇のころ、今の仙臺あたりまで開けたのでありますが、その北の方の蝦夷はまだよくなつかずに、たびたびさわぎをひきおこしました。そこで桓武天皇の

代に坂上田村麻呂が征夷大將軍としてしづめに向かひ今の岩手縣あたりまで進みました。朝廷では、蝦夷に田地をあたへ、農業や養蚕の、やりかたを敎へたり、また蝦夷の地方の役人にとりたてたりしました。また東國の人人で、東北の地にうつり住み、土地を開いて、蝦夷をみちびくものも少くありませんでした。かうして蝦夷は、國民と一つになつて行き、やがて東北も、他の地方とすこしも変らないやうになつたのであります

最澄と空海　佛敎も新しい時代にふさはしいものがおこりました。最澄の天台宗と、空海の眞言宗とがそれであります。二人は、桓武天皇の代に唐に渡り、それぞれ唐の名高い僧について勉强し、新しい佛敎を學んで帰り、これをひろめたのであります。奈良時代には、都の中にたくさんの寺ができ、そのために、僧が、政治に口を出したりしましたので、最澄は近江の比叡山に延暦寺を建て、空海は、紀伊高野山に金剛峯寺を建て、弟子たちに、山にはいつて一心に勉强することをすすめました。しかし二人とも、山の中にこもつて、世の中のことをなほざりにしたのではありません。空海は、國國をめぐり歩いて、田地を開くために池をつくつたりしました。讃岐の國につくつた萬農池は、今でもその地の農業に役立つてゐます。のちに、最澄は傳敎大師、空海は弘法大師の名をおくられました。

二　藤原氏の榮え

攝政と關白　大化の改新に、大きな手がらのあつた中臣鎌足が、病氣でなくなる前に、天智天皇は、鎌足に藤原といふ家の名をおさづけになりました。その子孫の藤原氏は、先祖の鎌足の手がらなどによつて、だんだん勢ひを得てきましたが、平安京の時代にはいつてから、ことに目だつて盛んになりました。このころになると、律令できめられた政治のやりかたも、時勢

にあはなくなり、ふたたび昔のやうに高い家からの人人が、代代重い役目につくならはしにかへつてしまひました。律令の規則にない新しい役もいろいろおかれたのでありますが、その中で最も高い攝政・關白は、藤原氏がひとりでしめることになりました。攝政・關白は、朝廷の政治をすべてきりもりする重い役目でありましたから、政治はこれから藤原氏の思ひ通りになつたのであります。

道長父子　宇多天皇は藤原氏のほかに、家がらは低いながらも學問にすぐれた菅原道眞をお用ひになり、つぎの醍醐天皇も、道眞を右大臣にして政治をおとらせになりました。しかし藤原氏は、よその氏の人が勢ひを得るのをきらつて、道眞を大宰府にうつしてしまひました。

かうして藤原氏の勢ひは、ますます盛んになりましたが、ことに道長と、その子頼通のころが、藤原氏の一ばんはなやかな時でありました。

三　はなやかな文化

文化のうつり行き　藤原氏をはじめ都の貴族たちが榮えて、はでなくらしをするやうになりましたので、これにつれて、はなやかな文化が生まれました。また、道眞の意見により、遣唐使がとりやめられたのち、まもなく、唐がほろび、渤海も、新羅も、つづいてほろびましたので、わが國と、大陸の國國との、公の交ぱりは、ひとまづ絶えました。そのためもありませう、今まで、支那の文化をとり入れることにいそがしかつた、わが國の文化も、しぜんと変つてきたのであります。

大和繪とかな　貴族たちのやしきは、寢殿造といふ建て方になりました。今の日本画のおこりである大和繪も、このころからはじまつてゐます。寢殿造のやしきにたてる　ふすまやびやうぶには、日本のけしきや四季のながめなどが、色とりどりの大和繪でゑがかれ

ました。

かなが、ひろく使はれるやうになつたのは、とりわけ大せつなことであります。不自由ながら、漢字で用をすませてきた國民は、いつのまにか便利なかなをこしらへて、これで國語を書きあらはすことをおぼえました。かなを用ひると、ふだん使つてゐることばが、そのまま書きあらはせますし、こまかな考へや感じも、思つた通りにのべることができます。まづこれを用ひた和歌が盛んになり、古今集をはじめ、和歌の本がつぎつぎにつくられました。また物語もつくられるやうになりました。竹の中から生まれて、月の都へ帰つた、かぐや姫の話を書いた竹取物語のやうなものがまづでき、のちには、そのころの世の中のありさまを、こまかにうつしたものがつくられ、つひに紫式部のつくつた、源氏物語のやうにすぐれたものがあらはれたのであります。紫式部のほかにも、枕草子を書いた清少納言など、文章の上手な女性が少くありませんでした。私たちの祖先ののこした文化の中には、このやうに女性の手でつくられたものもいろいろあるのです。

鳳凰堂　佛教も、藤原氏をはじめ、貴族の生活のうちにとり入れられて、めづらしいものではなくなりました。寺の建物や佛像・佛画も、みな日本風の、したしみやすいものになりました。道長は、京都に法成寺を建て、頼通は宇治に平等院をつくり、年とつてのち、その寺の中でくらしたのであります。法成寺はあとかたもなくなりましたが、平等院のおもな建物である鳳凰堂は今でものこつてゐて、そのころの藤原氏の榮えをしのばせてゐます。左右に廊下がのびてゐて、ちやうど鳳凰といふきれいな鳥が、つばさをひろげて、空をとんでゐるやうな形をしてゐるところから、鳳凰堂と呼ばれてゐるのです。

四　地方のありさま

都と地方　貴族の文化が、このやうに榮えてゐたころ、地方はどんなありさまだつたでせうか。貴族たちは、都で花やもみぢをながめたり、歌や音樂をたのしんだりして、はなやかなくらしをしてゐたので、美しい藝術などが榮えましたけれども、政治に熱心でなかつたため、世の中は、だんだんさわがしくなつてきました。地方の役人の中には、自分の利益になることだけを考へてゐるものが多く、地方の政治が行きとどかないので、それにつけこんでわるものがはびこり、人民のくらしをおびやかしました。都には市や店が開かれ、物賣りの女が歩くなど、あきなひがはんじやうし、淀川べりには淀・山崎・江口などの船つきばがあつて、にぎやかでしたが、ゐなかのさびしい道すぢには追ひはぎが出て、たび人をおそつたり、瀬戸内海では海賊がゆききの船の、つみ荷をうばつたりしました。それぱかりではなく都の中にさへ、ぬすびとが出たり、火つけがおこなはれたりするといふありさまとなつたのです。

莊園　班田の法もほとんどおこなはれなくなつて勢ひのあるものが、莊園といふ領地をたくさん持つやうになりました。藤原氏の勢ひがあのやうに盛んであつたのも、一つにはそのひろい莊園から、多くの税がはいつてきたからでありました。朝廷では、莊園をすこしでもへらさうと、いろいろ苦心をしたのですが、貴族の勢ひが強いので、ききめがありませんでした。しかし、さうしてゐる間に、この莊園の中から新しい力を持つたものが、だんだん頭をもたげてきます。それは武士でありました。

五　武士のおこり

武士　地方がさわがしくなると、農村の人人は、日ごろ田や畠をたがやすかたはら、武器をそなへ、たがひに力をあはせて、自分らを守らなければ安心できません。この場合、その中心となつて、農民をさしづした

のが、莊園に住む有力な地主たちでした。やがて、これらの人人は、いつのまにか、農業よりも弓矢をとるのが、おもな役目になりました。これが武士のおこりであります。

朝廷の役人は、世の中をしづめる力がありませんでしたので、地方にさわぎがおこると、それを平らげるには、いつも、武士の力をかりなければなりませんでした。武士は、ゐなかで質素なくらしをしてゐて、しようと思つたことは、かならず、實行する力を持つてゐましたし、主人とその部下とは、かたく結びついて、たがひにたすけあひましたから、身分は低くても、その勢ひは、あなどることができなくなりました。中でも、ことに名高いのが、東國の源氏と西國の平氏であります。

東國と源氏　東國は、まだあまり開けてゐなかつた上に、京都から遠くはなれてゐるので、都のはでな風にそまることが少く、しぜんに、しつかりした氣風がやしなはれ、早くから、武士の團結ができ上つてゐました。

平等院ができたころ、奥羽で安倍氏がそむき、源頼義がその子八幡太郎義家と、一しよにこれをしづめました。義家が、敵の大將安倍貞任を追ひつめながら、和歌をよんでこれによびかけたところが、貞任もまた和歌で答へたので、命をたすけたといふ話は、このいくさの時のことであります。そののち、また奥羽がみだれたので、ふたたび義家がこれを平らげました。いくさが終ると、義家は自分の財産を部下に分けあたへていたはりましたので、東國の武士は、みな義家になついて、源氏の勢ひが、ますます強くなりました。このやうにして、十二年にわたつてみだれた奥羽は、しづまり、このいくさで、義家をたすけた藤原清衡の勢ひが強くなりました。清衡は平泉に都の風をまねた町をつくりましたが、今でも中尊寺の金色堂に、その名ごりをとどめてゐます。

平氏の世の中　平氏は、崇德天皇の代に、忠盛が瀬戸内海の海賊を平らげてから、めきめきと頭をもたげてきました。

朝廷では、やうやく藤原氏の勢ひもおとろへはじめてゐました。その上、白河天皇が位をおゆづりになつてからも、上皇の御所である院で、政治をおとりになつたので、攝政・關白も名ばかりとなつてゐたのです。しぜん、地方で實力をやしなつてゐた武士が、京都にも、勢ひをのばしてくることになりました。

たまたま朝廷の内わあらそひがもとになつて、保元の乱が京都におこり、たがひに武士を味方にひき入れて戰ひました。この乱を平らげるのに、一ばん手がらのあつた平清盛の勢ひが、最も強くなりました。そこで源義朝らが、清盛をうたうとして、平治の乱をおこしましたが、かへつて清盛にほろぼされ、源氏はちりぢりになつてしまひました。やがて清盛は太政大臣に進み、一族も高い役や位にのぼりました。平氏の中には「平家でないものは人でない。」といふものさへ出たほどです。清盛は、そのあひだに、兵庫に港をきづき、唐のあとにおこつた宋と、貿易をこころみたり、瀬戸内海の音戸の瀬戸をきりひらいて、船が通れるやうにしたり、世の中のためになる仕事をしました。しかし勢ひにまかせたふるまひが多かつたので、あちこちからうらまれて、長く榮えることができませんでした。

義朝の子で、平治の乱ののち、東國に流された頼朝が、兵をあげて平氏をうたうとしますと、源氏の恩を忘れない東國の武士は、みな頼朝の味方になりました。そこで頼朝は、弟義經らを京都に攻めのぼらせました。都で公家のはでなくらしをまねてゐた平氏は、とてもこれにはかなひません。都をすてて西にのがれましたが、義經らがどこまでもこれを追ひかけましたので、とうとう壇浦の戰で一族みなほろび、二十年あまりで平氏の榮えも終りとなりました。

問題

一　なぜ今の京都の地が都にえらばれたのですか。

二　この時代に日本風の建物や繪や、またかな文字などの、できるやうになつたのはなぜでせう。

三　かな文字ができたのは文化の發達にどんなに役立ちましたか、またかな文で書かれた本にはどんなものができましたか。

四　地方に武士がおこつてきたのはなぜですか。

五　東國で源氏の勢ひが盛んになつたのはなぜですか。

六　平氏が榮え、またまもなくほろびたのはなぜですか。

京都の店

第四　武家政治

一　鎌倉幕府

幕府のなりたち　源平のあらそひが、源氏のかちいくさに終つたので、政治の權力は、しぜん、源頼朝の手にうつることになりました。これまで公家がとつてゐた政治を、武士がとることになつたわけです。そこで、武士の手で新しい政治をおこなふためには、いろいろな役所が必要になつてきます。まづ部下の取りしまりをする侍所ができました。それから政治のことを取りあつかふ政所ができました。またうつたへを聞いたり、そのさばきをする問注所ができました。侍所の仕事は、部下の武士でも十分まにあひますが、政治や裁判などのことは、これまでそんな仕事をしたことのない部下にまかせるのは、心配であります。そこで頼朝は、今までその仕事をしてゐた人を京都から招いて、これにあたらせることにしました。

このころ頼朝の命令は、一部の地方にしか行きとどきませんでした。それで全國に自分の力を行きとどかせるには、どうしても地方を治めるしくみをつくらなければなりません。平氏はほろびましたが、世の中はまだすつかり平和になつたわけではありません。その上、平氏をほろぼすのに手がらをたてた弟の義經が、兄のうたがひをうけて行くへをくらまし、そのゐどころさへわからないありさまです。頼朝は、これをよい事にして、義經をさがし、世のみだれを防ぐためといつて、全國に守護と地頭をおくことを、朝廷に願ひ出ました。守護は國ごとにゐて、警察の仕事をし、地頭は地方の莊園にゐて、税をとり立てる役目でありま

す。朝廷の許しをうけた頼朝は、それぞれ自分の部下を、守護や地頭にしました。このやうにして、頼朝は、政治の実権をすつかりにぎることになりました

まもなく、建久三年（西暦一一九二年）に、頼朝は、征夷大將軍に任せられました。ここに新しい政治のしくみができ上りました。これが武家政治であります。征夷大將軍が政治をとる役所を幕府といひますが、その幕府のおかれた鎌倉の名をつけて、鎌倉幕府といひます。武家政治は、こののち、いくたびか浮き沈みはありましたが、明治維新まで、七百年ばかりつづきました。

執權政治　頼朝は、弟たちを殺してしまつたので、源氏は、三代二十八年でほろびてしまひました。頼朝が死んだのちは、妻の政子とその一族北條氏が、幕府の實権をにぎりました。政子の父北條時政は、頼朝が兵をあげてから、ずつと変らず頼朝をたすけ、のちには政所の仕事をして執權といひ、幕府のうちで一ばん重んぜられてゐました。その子義時もまた執權となり、さらに侍所の仕事もするやうになりましたので、幕府の実権は、すつかり北條氏の手にうつつてしまひました。源氏がほろびたのち、源氏の血すぢを引いてゐる幼い將軍が、京都から迎へられました。しかし將軍といふのは名ばかりで、幕府の政治は執權北條氏の思ひ通りになつたわけです。これを執權政治といひます。執權政治は、こののち鎌倉幕府がほろびるまでつづきます。

貞永式目　時政の子義時からのち、執權には、つぎつぎにりつぱな人が出て、よい政治をおこなひました。義時の子泰時は、そのうちで最もすぐれた人であります。評定衆をおき、これと相談した上で政治をし、つねに政治が公平になるやうに心がけたので、人人は心から泰時にしたがひました。泰時が定めた貞永式目は、幕府の政治や裁判などのことをきめたおきてで、五十一條からできてゐます。かんたんながら、

実際に役に立つやうにできてゐましたので、こののち長く武家のおきての手本になりました。

泰時の孫時頼も、すぐれた執權の一人であります。時頼は、母松下禪尼の教へをよく守り、質素なくらしをして、部下の手本になりました。そして貞永式目をもとにして、よい政治をおこなひました。執權をやめてからも、幕府の政治が、正しくおこなはれてゐるかどうかを見るために、國國をまはり歩きました。

蒙古の來襲　時頼の子時宗が執權の時、蒙古の來襲がありました。大陸では、五十年ほど前に、蒙古に成吉思汗が出て四方をしたがへ、その孫忽必烈の時には、朝鮮半島にまで力をのばしてきました。そしてまもなく國の名を元と改めました。

忽必烈は、勢ひにまかせて、わが國までもしたがへようとし、たびたび使ひや手紙を送つてきました。わが國では、その手紙が無禮なので返事をしませんでした。すると忽必烈は、文永十一年（西暦一二七四年）十月、九百せきあまりの船に、およそ四万の兵を乗せて、博多湾に攻めこませました。武士たちは、勇ましく戦ひましたが、敵が上陸してきたため、大そうなんぎをしました。ところが、大風がおこつて、敵の船をくつがへしたので、これを退けることができました。

忽必烈は、それでもわが國をしたがへることを思ひきりません。こののち、弘安四年（西暦一二八一年）七月には、四千四百せきの船に、十四万の大兵を乗せて、ふたたび博多湾に攻めよせてきました。この時もまた大あらしがおこつて、敵の船を吹きちらしてしまひました。

二　社會と文化

武士の生活　政治の実権は、公家の手からはなれてしまひましたが、公家は京都で、昔とあまり変らない生活をしてゐました。しかし國民の中心となつて、世

の中をみちびいて行つたのは、武士であります。武士といつても、鎌倉にゐるものばかりではありません。大ていのものは地方に住んでゐたのです。

もともと武士は地方の莊園にゐた小さな地主であります。自分で田や畠をたがやして、農業をしてゐたものも少くはありませんでした。地方の武士の日日のくらしは、質素な農民のくらしとあまり変らないものでありました。これで武士のくらしが質素を重んじたわけがわかります。

武士のすまひは、板ぶきや草ぶきで、まはりに土手や垣をめぐらしたり、堀をほつたりしたものでありました。このやうなすまひの建て方を武家造といつて、公家の寢殿造にくらべると、ずつとかんたんなものであります。

商業の発達　地方には、國民のうちで一ばん数の多い農民が武士と一しよに住んで、農業にはげんでゐました。この武士や農民が、生活に必要な品物をとりかへるために、日をきめて市が立ちました。京都や鎌倉のやうな都市では、物を賣る店が集つて市町となり、人人は、いつでもほしい物を買ふことができました。かうして商業が発達してきたので、爲替や問屋などがおこり、遠い土地との間でも、自由に取り引きができるやうになりました。

新しい佛教　これまでの天台宗や眞言宗は、おもに貴族の間に信ぜられて、武士や農民などとはあまり関係がありませんでした。ところがこの時代になると、武士や農民の心によく合ふ新しい佛教の宗派が、つぎつぎにおこりました。法然の開いた淨土宗、その弟子親鸞のはじめた眞宗（一向宗）、一遍のおこした時宗、日蓮のとなへた法華宗（日蓮宗）などです。これらの宗派は、どれもみなわかりやすく、入りやすいので、武士や農民の間に、ひろく信ぜられました。また宋から禪宗がつたはりました。遣唐使が廢止されてから、支那との公の交はりは、ずつと絶えてゐましたが、商

人や僧の往來は盛んにおこなはれて、大陸の文物が持ちこまれました。唐のあとにおこつた宋との間にも、この関係がつづきます。禪宗には榮西の臨濟宗、その弟子道元の曹洞宗があります。また宋や元から多くの名僧が、遠く海を渡つてきました。禪宗はおもに武士の間に信ぜられてゐました。

學問と藝術　學問は、おもに公家や僧の間でおこなはれてゐましたが。あまり盛んであつたとはいへません。武士の中にも學問をこのむ人が出ました。北條實時・顯時父子が、武藏の金澤の稱名寺に金澤文庫をおこして、たくさんの書物を集めたのが、今もものこつてゐます。大學・國學の制度は、もうすたれてしまつて、寺の中で、新しい教育が、おこなはれるやうになりました。

文學では、昔からわが國ぶりをつたへた和歌がなほ盛んで、公家と僧が中心でありました。藤原定家は、このころ第一の和歌の名人であります。定家らが、後鳥羽上皇のおほせをうけて、新古今集をつくりました。これはこののち長く和歌をよむものの手本になりました。公家や僧ばかりでなく、武士の中にも、りつぱな和歌をよんだ人が少くありませんでした。とくに源氏の將軍實朝の和歌がすぐれてゐました。

かなまじりの力強い文章で、武家の榮えたりおとろへたりしたありさまをつづつた物語が、たくさん書かれました。これを軍記物といひます。中でも平家物語が有名であります。これは琵琶にあはせて語られ、ずつとのちの世まで喜ばれました。

建築や彫刻にも、國民生活をうつしたものが見られます。建築では、禪宗の寺院に、宋の建て方がつたはり、それに日本風が加へられました。彫刻では運慶・湛慶らの名人が出ました。今も東大寺にのこつてゐる仁王像は、運慶がつくつた作品の一つであります。

繪画では、大和繪が盛んで、物語や、社寺のいはれなどをかいた繪卷物が流行しました。繪卷物は、繪と

文章をかはるがはるかいた長い巻物であります。今にすぐれたものがたくさんのこつてゐます。

工藝では、武器をつくることが盛んでありました。よろひ・かぶとや刀などは大へんりつぱなものができました。刀では岡崎正宗が名人でありました。

問題

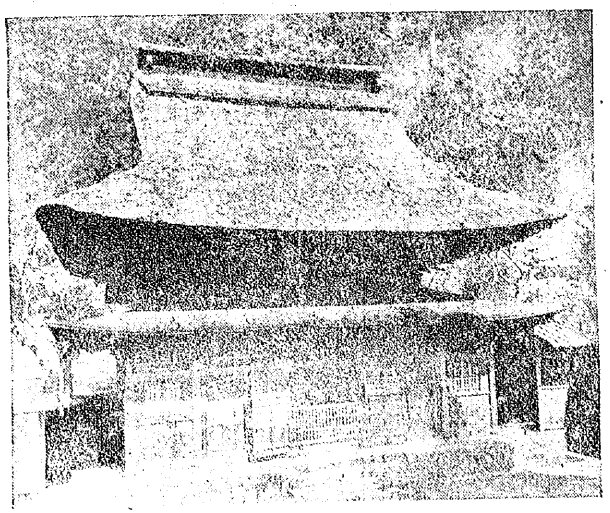
一　武家政治はどうしてはじまりましたか。これまで學んだところをふりかへつて考へてごらんなさい。

二　源頼朝はどうして守護と地頭をおいたのですか。守護と地頭の役目はどんなことでしたか。

三　武士はどういふ生活をしてゐましたか。またどんな家に住んでゐましたか。

四　どうして新しい佛教がおこつたのでせうか。

五　繪巻物とはどういふものですか。



禪宗の寺

第五　鎌倉から室町へ

一　建武のまつりごと

朝廷と幕府　政治の実権は、武家政治の時代になつて、朝廷からはなれました。後鳥羽上皇は、政治の実権を、武家からとりかへさうとお考へになりました。源氏がほろびたあとで、上皇は、執権義時をうつて幕府を倒すはかりごとをお立てになりましたが、失敗してしまひました。これを承久の変といひます。

後嵯峨天皇のあとに、後深草天皇、亀山天皇と、御兄弟が、つぎつぎに位におつきになりました。幕府は、このお二方の子孫が、かはるがはる位におつきになるやうに定めました。幕府を倒すはかりごとが二度とおこらないやうにするつもりだつたのです。

幕府のおとろへ　蒙古の來襲を防ぐために、幕府はその力を大かたつかつてしまひました。それで、手がらを立てた部下の武士に、十分賞をあたへることができません。その上、武士もこのいくさでたくさんの費用をつかつたので、その生活は目に見えて苦しくなりました。幕府は、力とたのむ部下がこまつても、それを救つてやる力がなくなつてゐました。

その上に、執権高時は、いろいろな遊びがすきで、ぜいたくなことばかりして、すこしも政治に心をいれようとしませんでしたので、人人の心は、だんだん幕府からはなれて行きました。

このやうな時に、後醍醐天皇が位におつきになりました。天皇は、高時をうつて、幕府を倒すはかりごとをお立てになりましたが、はかりごとがもれて失敗しました。けれども天皇のご決心は変りません。まもな

く第二回のはかりごとをお立てになりました。このたびも、用意ができないうちに、鎌倉に知れてしまひました。そこで、天皇は、笠置山にこもつて、國國の武士をお召しになりました。高時は、大軍をさしむけて、笠置山をおとしいれ、天皇を隱岐の島におうつししました。これを元弘の変といひます。

河内の楠木正成は、お召しをうけると、すぐに兵をあげて、幕府の大軍を大いになやましました。それを聞いた國國の武士は、一度に立ち上りました。天皇は、このやうすをお聞きになり、こつそり隱岐を出て、伯耆の國においでになりました。

高時は、おどろいて、足利高氏を伯耆に向かはせましたが、高氏は、途中で幕府にそむき、京都にゐた北條氏の一族を攻めほろぼしました。關東でも、新田義貞が兵をあげて、鎌倉に攻め入つたので、高時は一族と一しよに自殺し、北條氏も鎌倉幕府も、ともにほろびてしまひました。時に元弘三年（西暦一三三三年）で、賴朝が幕府を開いてからおよそ百四十年でありました。

建武の新政　天皇は、まもなく京都におかへりになつて、新しい政治のしくみをおつくりになり、記錄所でしたしく政治をおとりになりました。裁判をする雜訴決斷所や、京都をまもる武者所をおき、國司と守護とで、地方の國國を治めさせました。あくる年の正月に、年号が建武と改まつたので、これを建武の中興といひます。

天皇は、皇子護良親王を征夷大將軍とし、手からのあつた公家や武士を、それぞれ重い役におつけになりました。けれども、長い間政治からはなれてゐた公家では、政治はうまくはかどりません。その上に、幕府が倒れたので、公家は武家をあなどりました。武家は、このたびのことは、自分たちが命がけで戰つたから成功したのだと思つてゐるのに、公家が重んぜられるのを見ると、不平でたまりません。かうして公家と

武家の仲は、だんだんはなれて行きます。武家のうちには、武家政治の方がよかつたと思ふものさへ出てきました。建武の中興は、この公家と武家の仲たがひから失敗することになりました。

京都と吉野　高氏は　天皇の御名尊治の一字をいただいて尊氏といひ、武士のうちで一ばん勢ひがありました。自分が源氏の一族なので、ふたたび源氏の幕府を、おこさうとする野心を持つてゐました。その時に、關東で北條氏の一族がそむきました。尊氏はこれをうつて、征夷大將軍になることを願ひましたが、お許しがありません。そこで勝手に鎌倉に下つてそむきました。まもなく京都に攻めのぼりましたが、さんざんにまけて、九州へにげました。九州でたくさんの武士をしたがへた尊氏は、大兵を海と陸の二手に分けて攻めのぼりました。途中、湊川で正成をやぶり、勝ちに乘つて京都に攻め入りました。

そして、後深草天皇の子孫である光明天皇を立て、皇位のしるしをお渡し下さるやうに後醍醐天皇に願ひました。天皇は、にせのしるしを光明天皇に渡し、こつそり京都を出て吉野におうつりになり、ここで政治をなさいました。時に延元元年（西暦一三三六年）でありました。このの ち四代五十七年の間、吉野が皇居になりました。一方京都には、光明天皇がおいでになりました。これからは、公家も武家も、思ひ思ひに、両方の朝廷に仕へて、たがひに爭ひをつづけることになります。

このの ち尊氏の孫義滿は、吉野の後龜山天皇に、京都におかへりになることを願ひました。天皇は、この願ひをお聞き入れになつて、京都の後小松天皇に、位をおゆづりになりました。これで、朝廷は一つになつて、長い間の爭ひはしづまり、また平和な時代になりました。

二　室町幕府

幕府の成り立ち　尊氏は、延元三年（西暦一三三八年）光明天皇の許しをうけて、征夷大將軍になりました。そして鎌倉幕府を手本にして幕府をつくりました。こののち義滿の時になつて、足利氏の勢ひが強くなつたので、幕府のしくみもでき上りました。義滿は京都の室町のやしきを幕府にしたので、足利氏の幕府を室町幕府といひます。

幕府には、將軍が政治のことを相談する管領といふ重い役があつて、斯波・細川・畠山の三つの家が、この役につくことになつてゐました。管領の下に、鎌倉幕府と同じく、政所と問注所と侍所がありました。中でも侍所が一ばん重い役所でした。幕府は、鎌倉に關東管領をおきました。關東管領には、足利氏の一族がなりました。地方の國と莊園には、守護と地頭がゐました。

政治のみだれ　尊氏が朝廷にそむいた時、たくさんの賞をあたへる約束をして、武士たちをさそひました。それで、將軍になつても、部下をとりしまることができません。部下の中には、いくつもの國の守護になつて、將軍の命令をきかないものが出ました。これが幕府の政治のみだれるもとになりました。

その上、義滿や義政のやうに、はでなことのすきな將軍が出たので、幕府の費用はだんだん足りなくなつてきました。そんなことにはすこしもかまはず、義滿は、室町にりつぱなやしきをつくりました。人人は、これを花の御所といひました。義滿は、京都の北山にぜいたくなべつさうを建てました。かべや柱などに金ぱくをはつたので、これを金閣といひます。義政も、義滿をまねて、東山に銀閣をつくりましたが、途中で費用がつづかなくなりました。

盛り上る力　將軍がこのやうなぜいたくをする費用は、どこから出たのでせうか。幕府は、全國にたくさんの領地を持つてゐました。けれども、そこからとりたてる稅だけでは、たうていまにあひません。守護や

地頭からとり立てようとしてもなかなか幕府のいふことを聞きません。

それで人民から、稅をとり立てることにしました。このころも、國民の中心となつたのは、やはり武士でした。けれども國民の中で一ばん數の多いのは農民です。幕府はその農民から重い稅をとり立てることを考へました。農民がたがやしてゐる田や、住んでゐる家にまで稅をかけることにしたのです。またゆききのはげしい道路や、船の出入りの多い港に關所をつくつて、人馬や荷物や船に稅をかけました。それでもまだ足りないので、京都の金持の商人から重い稅をとり立てました。商人たちは、重い稅ををさめるかはりに、幕府の役人とくんで、いろいろよくないことをして利益をあげることを考へました。これでは人民が一ばんひどい目にあふばかりです。

そのために苦しんだ人民は、大せい力をあはせて一揆をおこしました。これを土一揆とも德政一揆ともいひました。幕府には、もうそれをしづめる力はありません。それで世の中はだんだんさわがしくなりました。

應仁の亂　このやうに幕府の政治がみだれ、世の中がさわがしくなつて、應仁の亂がおこりました。義政が、ぜいたくにふけつて政治に力をいれないのをよいことにして、管領の細川勝元と山名宗全が、勝手に勢ひを爭つてゐました。そこへ義政のあとつぎのことでいざこざがおこり、幕府の中は、勝元方と宗全方の二つにはつきり分れてしまひました。斯波氏や畠山氏の間にも、同じやうなことがおこつて、家の中が二つに分れました。これがもとになつて、京都でいくさがはじまりました。やがて、戰ひは全國にひろがり、それが十一年もの間つづいたのです。京都では、御所も、公家や武家のやしきも、たくさんの社や寺などもみな燒けて、古い宝物もすべて失はれてしまひました。これまで榮えてゐた都は、一めん燒け野原になつてしまひました。けれども、この燒けあとから、新しい力が

生まれ出て、つぎの新しい世の中ができ上つてくるのです。

三　経済と文化

経済の発達　室町幕府の時代は、政治がみだれ、つひには應仁の乱がおこるなど、世の中はおだやかではありませんでした。けれども、その間に國民の生活はだんだん進み、それにつれて経済も発達しました。

農業はしだいに進んで、米のあとに麥をつくることも、ひろくおこなはれるやうになりました。宇治の茶が有名になり、甲州ぶだうや紀州みかんが出はじめたのも、このころのことです。漁業も盛んで、あちらこちらに水産物を賣り買ふ魚市場ができ、瀬戸内海の沿岸では塩田を開き、大がかりに塩をとるやうになりました。日日の生活に必要な道具を作つたり、外國に輸出したりしたので、鉄・銅・金・銀などの産額もふえ、それにつれて鑛業や工業も発達しました。

いろいろな物産が、たくさん出まはるにつれ、商業も進んできました。これまで目をきめて立てられた市も、あるところでは毎日開かれ、しまひには店になつてきました。また京都やその近くに、米や魚だけを取り引きする進んだ市場さへできました。ここで取り引きするのは、もう一ぱんの人人ではなく、商人たちでした。

物の賣り買ひに銭を使ふことも、もう一ぱんに行きわたつて、おもに明から輸入した永樂銭が、用ひられました。それにつれて爲替や問屋のしくみも、ととのつてきました。すつと前から商工業者は、同じ仲間で組合のやうなものをつくり、領主に税ををさめるかはりに、自分たちだけで商賣をすることを許してもらつてゐました。これを座といひます。この座も、このころになつていよいよ発達しました。

外國貿易　國内の経済が発達するとともに、外國貿易も盛んになりました。蒙古が來襲したのちも、四國・

中國・九州の人民のうちには、遠く支那や朝鮮に渡つて、貿易をしたものがありました。取り引きが思ふやうにならないと、武力をふるふことがありましたので、大陸では倭寇といつて恐れられました。

この支那との貿易は、大そう利益になつたので、尊氏は、京都に天龍寺を建てる費用をつくるために、貿易船を元に送りました。これを天龍寺船といひました。支那では、元のあとに明がおこりました。義滿は、貿易で利益を得ようと思つて、明と交はりを開きました。そして明から日本國王といはれ、明へ送る手紙に臣と書きました。義持の時に、明との交はりをやめてしまひましたが、義政は、また明と交はりを開いて、盛んに貿易をしました。明へは、刀や銅その他の鑛産物や、工藝品を輸出し、そのかはりに、銅銭・生糸・絹織物・書画などを輸入しました。朝鮮との貿易も、このころ盛んにおこなはれました。

文化の発達　幕府が京都にあつたので、武家と公家の仲は、大そうしたしくなりました。將軍は、公家と同じやうに、朝廷から、高い位をいただき、重い役に任ぜられました。武士の生活は、だんだん公家の生活に近くなつて、武家の文化と公家の文化が一つにまとまつてきます。また武家が深く禪宗を信じたので、文化の上に、禪宗のあつさりしたおもむきが加はり、これがひろく國民全体に行きわたりました。

佛教　禪宗は、武家が大せつにしましたので、いよいよ盛んになりました。禪宗の僧のうちには、將軍の政治の相談相手になつたものもありました。義滿の時、京都と鎌倉の五つの大きな寺が、五山といはれて重んぜられました。一方人民の間には、法華宗・浄土宗・一向宗が、ますますひろまつて行きました。

學問と文學　學問は、おもに公家と五山の僧の間で盛んでありました。とくに五山では、詩や文章をつくることがはやりました。これを五山文學といひます。また學問は、武家の間にもひろく行きわたりました。

関東の足利學校には、遠く九州から勉強にきたものもありました。寺の中での教育はこのころになつて、ますますひろまつて行きました。これがのちに寺子屋になります。

和歌もなほ行はれてゐましたが、連歌がはやり、武家や人民の間にとくに喜ばれました。連歌は、たくさんの人があつまつて、一つづきの長い句をつくるのです。宗祇は連歌の名人として有名な人でした。

美術工藝　義政は、大そう美術がすきでしたので、美術工藝は目だつて発達しました。繪画はとくに盛んで、支那から輸入された宋や元の名画は、人人に大そう喜ばれ画家にはよい手本になりました。画家の中でも雪舟が有名であります。雪舟は、支那の繪のかき方を習つて、墨だけで山や川や湖の景色をかきました。狩野元信は、わが國と支那の繪のかき方を一しよにして、新しい狩野派をおこしました。これはずつとのちまで盛んでありました。

工藝では、刀のかざりに金銀で手のこんだ細工をする後藤祐乗といふ名人が出ました。そのほか、蒔繪や陶器もりつぱなものがたくさんできました。

風俗と生活　武家のすまひは書院造といつて、今の私たちの家に近いものになりました。これは禪宗の寺院のつくりをまねたもので、玄関や床の間をつけ、部屋は障子でしきり、疊をしくやうになりました。庭には水と石をうまくとりあはせて、せまい庭でひろく見せ、深山のやうなしづかな氣持を出さうと工夫しました。今も京都の寺には、このころのりつぱな庭がのこつてゐます。茶の湯や生花がはじまり、能や狂言が喜ばれました。七月のお盆に、人人が集まつてをどる盆踊もこのころから盛んになりました。

四　新しい時代への動き

世のありさま　應仁の乱からのち、幕府の力はおとろへてしまひました。將軍はただ名だけで、実権は、

下へ下へと、力のあるものにうつつて行きました。地方でも、古い家はほろびて、実力のあるものがこれにかはりました。かうして、実力のある大名が、新しくおこつて、國國を分け取り、たがひに、勢ひを爭ふことになりましたので、この時代を、戰國の世ともいひます。

大名の分立　関東では、関東管領の家もいつのまにかおとろへ、部下の上杉氏が勢ひがありました。これも新しくおこつた北條氏に、追ひはらはれてしまひました。中部地方では、越後に上杉氏、甲斐に武田氏がをり、駿河では今川氏が勢ひがありました。中國地方では、はじめ大内氏が榮えてゐましたが、のちに毛利氏がこれにかはりました。四國の長宗我部氏、九州の大友氏・龍造寺氏・島津氏などが勢ひを持つてゐました。これらの大名は、すきがあれば隣りの國を攻めとらうとしてゐました。そしてよい政治をして、自分の國をよく治めました。中でも北條氏や、武田氏の政治はりつぱなものでありました。

大名のゐる城のまはりには、たくさんの人が集つて、にぎやかな町になりました。これを城下町といひます。城下町は、しぜんに、その地方の、政治や商工業の中心になりました。大名がとくに力をいれたので、農業がにはかに発達し、鑛業の技術も大そう進みました。

皇室のおとろへ　これまで領地からあがる税と、幕府がさしあげる費用とで、おくらしになつてゐた皇室は、幕府の力がおとろへた上に、領地は地方の武士がとつてしまつたので、大そうおこまりになりました。御所は荒れても、つくろふことができないありさまでした。

このおこまりのありさまを知つた地方の大名の中には、すすんで皇室の費用をさしあげるものが多くなつてきました。

世界の波　このやうな時に、ヨーロッパ人がはじめ

て渡つてきました。ヨーロッパでは、このころ航海術が進み、ポルトガル人はアフリカの南をまはつて、インドにくる航路を発見しました。そして東洋の國國と盛んに貿易をしてゐました。天文十二年（西暦一五四三年）ポルトガルの商船が、九州の南の種子島に流れつきました。そしてわが國に鉄砲をつたへました。鉄砲は、これまでの武器にくらべると、すつとすぐれてゐましたので、たちまち全國にひろまりました。まもなく堺をはじめ、各地で鉄砲がたくさんつくられるやうになつて、これまでのいくさのやり方は、変つてしまひました。こののち、イスパニヤの商船もくるやうになり、ポルトガルの商船と一しよに貿易をしました。この人人は、みな南の方からくるので南蠻人といはれました。これからわが國は世界の歴史の仲間入りをするやうになりました。

また天文十八年（西暦一五四九年）には、クリスト教の宣教師フランシスコ＝ザビエルがきて、その教へをつたへました。わが國では、この教へを、きりしたん宗といひました。

このやうに、國の内からも外からも、新しい世の中が生まれる動きがおこつてきました。駿河の今川義元、越後の上杉謙信、甲斐の武田信玄らは、早く京都にのぼり、皇室をいただいて、國内を一つにまとめようと思ひました。けれども、みなその目的をとげることができませんでした。全國統一のもとをつくつたのは、織田信長であります。

問題

一　鎌倉幕府はなぜおとろへるやうになつたのでせうか。

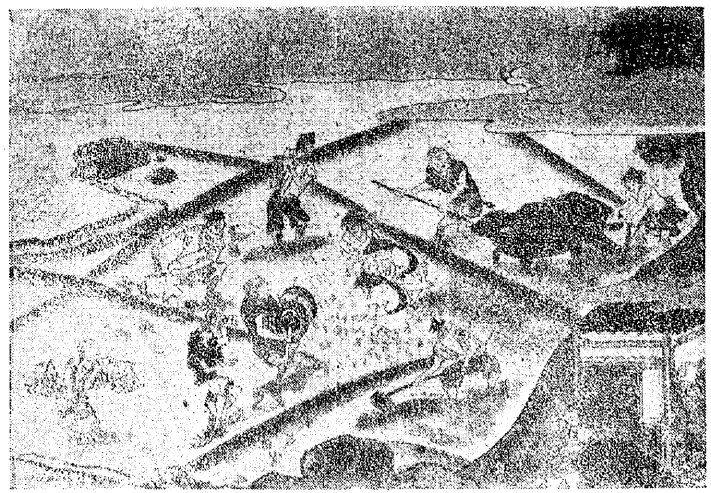
二　建武の中興が失敗したのはなぜでせうか。

三　この時代の美術はどうして発達しましたか。

四　ヨーロッパ人が渡つてきてから、世の中にどんな変化がおこりましたか。

雪舟の絵

南蠻寺



室町ころの農村

第六　安土と桃山

一　國内の統一

安土の城　織田信長の家は、もと管領斯波氏の部下で、代代尾張に住んでゐました。信長が、東隣りの今川義元をたふしてから、にはかに、勢ひが強くなりました。

正親町天皇は、信長の名をお聞きになつて、領地を武士の手からとりかへすことを命せられました。このころ京都では、將軍義輝が部下に殺されたので、弟の義昭が信長をたよつてきました。信長は、すぐに義昭と一しよに京都にのぼり、朝廷に願つて、義昭を將軍にしてもらひました。

信長は、長い間、荒れたままになつてゐた御所の、つくろひをはじめました。ひまをみては、自分で、工事を見まはりましたので、二年あまりののちには、すつかり見ちがへるやうになりました。こののちも、御領地を、とりかへしたり、御費用をさしあいたりしました。

義昭は、はじめのうちは、心から信長をたよりにしてゐましたが、信長の勢ひが強くなるのを見て不安になりました。信長を除かうとしましたが、かへつて信長に京都を追ひはらはれてしまひました。時に天正元年（西暦一五七三年）でありました。尊氏が幕府を開いてから、二百三十年あまりで、室町幕府はほろびました。

この間に、信長は、近江の安土に大きな城をきづいて、全國統一の仕事を進めて行きました。

信長は、こののち徳川家康と一しよに、甲斐に攻め

入つて、武田氏をほろぼしました。また部下の羽柴秀吉をやつて、中國の毛利氏をうたせました。秀吉をたすけに行かうとして、安土をたち、京都の本能寺にとまりましたが、部下の明智光秀に殺されました。このために、全國統一の仕事は、中途でつまづきました。信長の志をついで、これを成しとげたのが秀吉であります。

全國統一　秀吉は、信長が殺されたしらせをうけると、すぐに毛利氏と仲なほりをして、光秀をほろぼしました。そして信長の部下もつぎつぎに秀吉にしたがひました。徳川家康とも、二度は尾張で戰ひましたが、まもなくこれと手をにぎりました。それから四國の長宗我部氏、九州の島津氏をしたがへ、最後に關東の北條氏をほろぼして、全國統一の仕事を成しとげたのであります。天正十八年（西暦一五九〇年）のことです。應仁の乱から百三十年あまりで、國内はやうやく平和になりました。

聚樂第　秀吉は、光秀をほろぼしたのち、大阪に大きな城をきづきました。城のまはりは、にぎやかな町になりました。大阪の榮えるもとができたのです。全國統一が進むにつれて、秀吉は、高い位に上り、關白に任せられて、豐臣といふ家の名をたまはりました。秀吉は、京都に聚樂第をつくり、ここに後陽成天皇の行幸をあふぎました。この時、皇室に御料をさしあげ、公家にも、それぞれ領地をおくりました。

新しい政治　信長や秀吉は、いつも國全体のためを考へて、いろいろ新しい政治をしました。

まづ、農業は、一ばん大せつな産業でしたので、そのもとになる土地を、しらべることがはじまりました。信長も秀吉も、新しく、土地のひろさをはかり、その良しあしを、きめて、米のとれ高を計算させました。これを檢地といひます。秀吉は、全國の檢地をしました。

この檢地で、これまで、莊園ごとにちがつてゐた土

地のはかり方や、よび名が、すつかり一つになりました。

わが國では、これまで、長い間おかねをつくりませんでした。それで、おもに明から輸入した、永樂錢が使はれてゐました。その中にはいろいろ質のよくない錢がありましたので、物を買ふのに不便なときがありました。

このころ鑛業が発達して、金や銀や銅がたくさん出ましたので、秀吉は、これで金貨や銀貨や銅貨をつくつて、人人の不便をのぞかうとしました。金貨はその大きさで、大判・小判といはれました。

戰國の世には、大名は、敵に攻められることを心配して、人人の不便などは考へずに、道路は荒れたままにしておきました。そして、國ざかひの大事なところに關所をつくり、通る人をしらべて、人馬や荷物などに稅をかけました。信長は、道路をつくつたり、橋をかけたりした上に、關所をすつかりやめてしまひました。これで、どれだけ便利になつたかわかりません。秀吉は、これさえまちまちであつた、道のりのはかり方を改め、おもな道路には、一里ごとに塚をつくつて、道のりをはつきりさせました。

戰國の大名の中には、これまでの座をやめて、誰でも自由に商賣ができるやうにしたものがありました。信長や秀吉も、これと同じやり方で商工業をすすめました。そこで交通は便利になり、商賣も自由にできるやうになつたので、城下町はにぎはひ、商工業も大そう発達しました。

戰國の世では、領主の命令があれば、誰でも、武器をとつて戰はなければなりませんでした。世の中を平和にするには、それぞれ自分の仕事に力をいれさせることが大せつであります。それで秀吉は、武士以外のものから、刀や槍や鉄砲をさし出させました。これで武器を持つものと、持たないものとの區別がはつきりしました。農民は、平和に農業をはげめばよいことに

なつたわけです。これを刀狩といひます。

二　外交と文化

外交の失敗　秀吉は、早くから海外に力をのばさうと思つてゐました。全國を統一したのち、明をうつはかりごとを立て、朝鮮にその道案内をたのみました。けれども朝鮮は、明の勢ひを恐れて聞き入れませんので、まづこれをうつことにしました。

文祿元年（西暦一五九二年）大軍が朝鮮に向かひました。秀吉は、肥前の名護屋にゐて、これをさしづしました。わが軍は、その都の京城をおとしいれ、朝鮮をたすけにきた明の兵をうち破りましたが、海軍がふるはないので、食糧を送るのに大そうこまりました。やがて明から申し出てきましたので、ひとまづ伸なほりをすることにしました。これを文祿の役といひます。

けれども、この仲なほりの約束に行きちがひがあり、明から秀吉を日本國王にするといふ手紙を送つてきました。秀吉は大そう怒つて、慶長二年（西暦一五九七年）ふたたび大軍を朝鮮に攻め入らせました。今度は、文祿の役のやうにうまく行かず、朝鮮の南部で苦しい戰ひがつづきました。そのうちに秀吉が死んだので、ゆゐごんにしたがつて、將士はみな國に歸りました。これを慶長の役といひます。

この役は、七年もかかつて、多くの人の命とたくさんの費用をむだにしただけでありました。

少年使節　信長は、きりしたん宗をひろめることを許しましたので、京都や安土に教會堂が建ち、學校もできました。この教會堂を人人は南蠻寺といひました。大名の中にも信者が多くなりました。九州の大友・大村・有馬の三人の大名は、ことに熱心な信者で、天正十年（西暦一五八二年）には、はるばるローマ法王のところに使ひを送つたほどでありました。この使ひにえらばれたのは、伊東滿所、千々岩清左衛門

らで、みな十歳あまりの少年でした。少年たちは、ローマで大へんなもてなしをうけ、いろいろめづらしいみやげ物をもらつて、天正十八年（西暦一五九〇年）に帰りました。

秀吉は、九州をしたがへてから、きりしたん宗をひろめることを禁じました。けれども、ヨーロッパの國國との貿易は許しました。マニラにゐるイスパニヤの総督やゴアにゐるポルトガルの総督に、貿易のことで手紙を送つてゐます。

桃山文化　このころは、古いものがすたれて新しいものがおこり、長い間の世のみだれが治まつて、平和になつた時でありましたから、世の中はみないきいきとしてゐました。また信長や秀吉は、のびのびとしたことをこのみましたので、文化の上にも、しせんにその氣持が出ました。秀吉が年をとつてから住んでゐた伏見城のあとを桃山といひましたので、これを桃山文化といひます。

信長や秀吉は、安土城・大阪城・伏見城などの、大きな城をきづきました。京都の西本願寺の唐門は、このころ伏見城にあつたものです。城の中には、ふだんに住む書院造の家も建てられました。書院造は、ますますりつぱになつて、美しい繪をかいたふすまや、こみいつた彫刻でかざられてゐました。繪では狩野派が大そう盛んで、永徳や山樂のやうな名人が出ました。そして、金や濃い綠の色を使つて、大きな繪をかきました。

京都で、美しい金襴が織りはじめられ、西陣織の発達するもとになりました。文祿・慶長の役の時、九州の大名のうちには、朝鮮の陶工をつれて帰つたものがありました。これから有田燒や薩摩燒などがおこりました。

茶の湯はますます盛んになりました。千利休が、茶の湯の作法をつくりあげたのは、このころのことです。秀吉は大そう茶の湯がすきでした。京都の北野の

松原で、大がかりな茶の湯の會をして、茶の湯のすきな人は誰でも仲間に入れました。

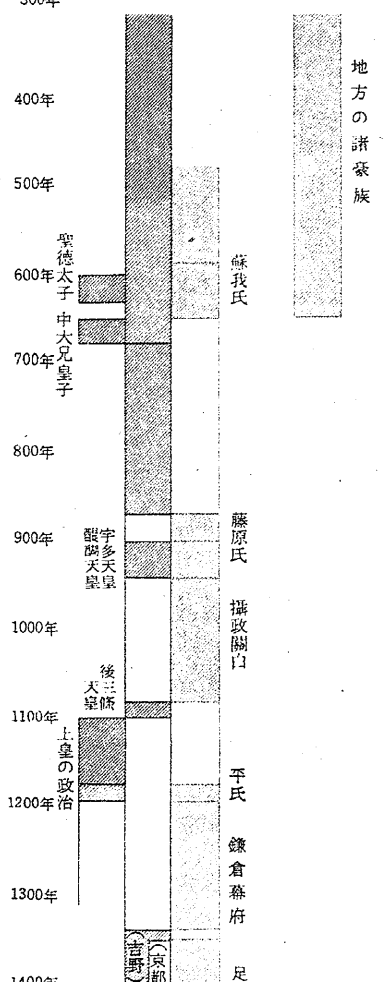
問題

一　秀吉は、全國を統一してからどのやうな仕事をしましたか。

二　刀狩があつて、世の中はどんなに変りましたか。

三　きりしたん宗がひろまつてから、どういふことがおこりましたか。

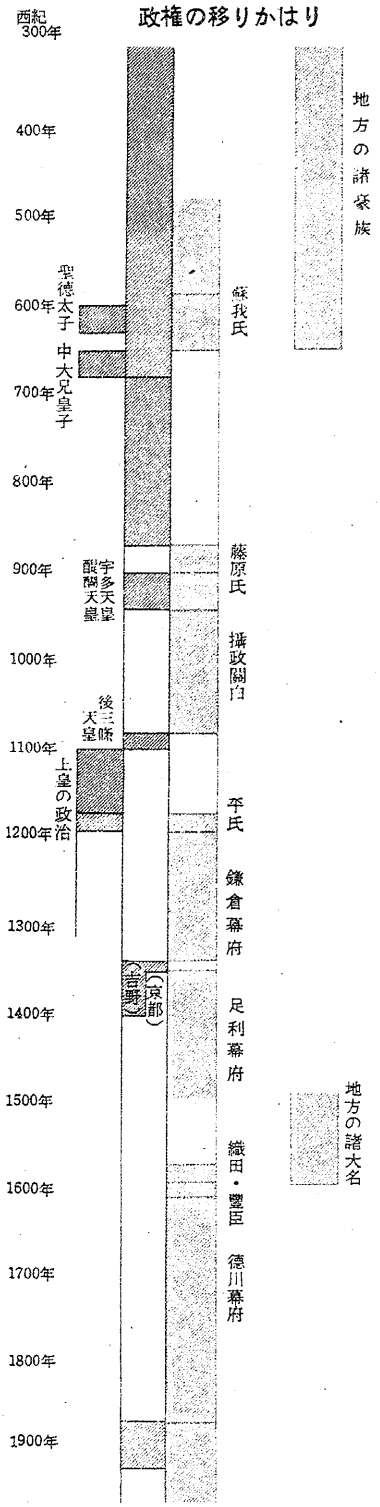
年　　表



西紀	おもな事がら	題目	朝鮮	支那	西洋
			高句麗 百濟 新羅	晉	
391	朝鮮に兵を送る	日本のあけぼの			
476				南北朝	476 西ローマ帝國ほろびる
538	佛教つたはる				
593	聖徳太子攝政となる	開けゆく日本		隋	
645	大化の改新はじまる				
701	大寶律令ができる		新羅	唐	
710	奈良を都とする				
741	國分寺を造る				
794	平安京を都とする	平安京の時代		渤海	
801	坂上田村麻呂蝦夷をしづめる				
858	藤原氏攝政となる				871 英國王アルフレッド即位
894	遣唐使をとりやめる				915 ケンブリッチ大學開かる
901	菅原道眞大宰府にうつされる			五代	
1053	平等院の鳳凰堂ができる		高麗		
1089	上皇の政治はじまる			宋	1096 第一回十字軍遠征
1167	平清盛太政大臣となる				
1185	平氏ほろびる				
1192	源頼朝幕府を開く				
1221	承久の變	武家政治		蒙古	1215 英國大憲章できる
1274	文永の役				1249 オックスフォード大學開かる
1281	弘安の役				
1333	鎌倉幕府ほろびる				
1334	建武の中興			元	1271 マルコ・ポーロ東亞へいたる
1392	後龜山天皇京都におかへりになる	鎌倉			
1397	金閣ができる				

大津京　藤原京　奈良京　平安京　鎌倉　吉野　工

年　　表



斜線のこいところは実権を示す
うすいところは幾分弱いことを示す

おもな事がら

391 朝鮮に兵を送る

538 佛教つたはる

593 聖徳太子摂政となる

645 大化の改新はじまる

701 大寶律令ができる
710 奈良を都とする
741 國分寺を造る

794 平安京を都とする
801 坂上田村麻呂蝦夷をしづめる

858 藤原氏摂政となる
894 遣唐使をとりやめる
901 菅原道眞大宰府にうつされる

1053 平等院の鳳凰堂ができる
1089 上皇の政治はじまる

1167 平清盛太政大臣となる
1185 平氏ほろびる
1192 源頼朝幕府を開く

1221 承久の變

1274 文永の役
1281 弘安の役
1333 鎌倉幕府ほろびる
1334 建武の中興
1392 後龜山天皇京都におかへりになる
1397 金閣ができる
1439 この頃足利學校が再興された

1467 應仁の乱はじまる
1477 應仁の乱終る
1543 ポルトガル人種子島に來る
1549 クリスト教つたはる
1573 室町幕府ほろびる
1592 文祿の役
1600 關原の戰
1603 德川家康幕府を開く
1639 寛永鎖國令

1684 貞享暦を用ふ
1716 吉宗將軍となる
1727 この頃さつまいも全國にひろまる

1774 解體新書ができる
1808 間宮林藏樺太探檢

1853 ペルリ來る
1867 王政復古
1889 憲法發布
1914 第一次世界大戰はじまる
1931 滿洲事變はじまる
1939 第二次世界大戰はじまる
1945 ポツダム宣言受諾

大津京　藤原京　奈良京　平安京　鎌倉　吉野　京都　江戸　東京

題目

日本のあけぼの
開けゆく日本
平安京の時代
武家政治
鎌倉から室町へ
室町から江戸へ
江戸と大阪
幕府の衰亡
明治維新の日本
世界と日本
大正・昭和の日本

朝鮮

高句麗　百濟　新羅

新羅　高麗　朝鮮

支那

晉　南北朝　隋　唐　渤海　五代　宋　蒙古　元　明　清　中華民國

西洋

476 西ローマ帝國ほろびる

871 英國王アルフレッド即位
915 ケンブリッチ大學開かる

1096 第一回十字軍遠征

1215 英國大憲章できる
1249 オックスフォード大學開かる

1271 マルコ・ポーロ東亞へいたる

1453 東ローマ帝國ほろびる
1492 コロンブスアメリカ發見
1498 ポルトガル人インドにくる
1517 ルーテル宗教改革
1530 コペルニクス地動說
1558 エリザベス女王即位
1600 英國東印度會社をたてる

1649 英國共和制となる
1660 英國王政復活
1661 マルピギー血球發見
1687 ニユートン重力法則發見
1707 大ブリテン國成立

1769 ワット蒸氣機關發明
1776 アメリカ獨立宣言
1789 フランス革命おこる
1796 ジエンナー種痘法發明
1802 汽車の發明

1853 ロンドン博物館開かれる
1863 奴隷解放
1897 無線電信の發明

1919 ワシントン會議

昭和二十一年八月十六日 翻刻印刷
昭和二十一年九月十日 翻刻發行
昭和二十一年八月十六日 文部省檢査濟

くにのあゆみ上
新 定價金壹圓五拾錢

著作權所有

著作兼發行者 文部省

翻刻發行兼印刷者 東京都王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社
代表者 井上源之丞

印刷所 東京都王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社工場

Approved by Ministry of Education (Date Au .16, 1946)

發行所 東京書籍株式會社